

新潟県
開催

第21回全国大会

全国サンマッシュ生産協議会

画期的な害虫対策を発表

全国の菌床しいたけ生産者で組織する全国サンマッシュ生産協議会(森坪清則会長・会員約2100人)の第21回全国大会が2月27、28の両日、新潟県湯沢町のカルチャーセンター、ホテルNASSPAニューオータニにおいて開催された。国内産生しいたけの安全性が見直される中、全国各地から過去最大の約670人の会員と関係者が参集、初日には総会と研修会、品評会が、2日目には生しいたけの年間売上げ8億円を超える大産地、南魚沼市の八色椎茸生産組合の現地視察研修が行われた。

総会の冒頭にあいさつに立った森坪清則会長は、「情勢に対応して国産安心きのこや生産情報公表JASなどの認証取得と

市場や消費者への認知度を促進させること」「サンマッシュ統一ブランドをさらに向上させて、協議会会員の連携を一層深め

ること」「全国の青年部会、婦人部会を拡大発展させること」を提唱した。

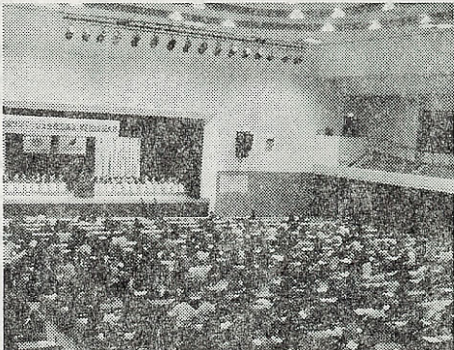
また、中国産生しいたけの輸入量減少や原木栽培といったの生産量減少



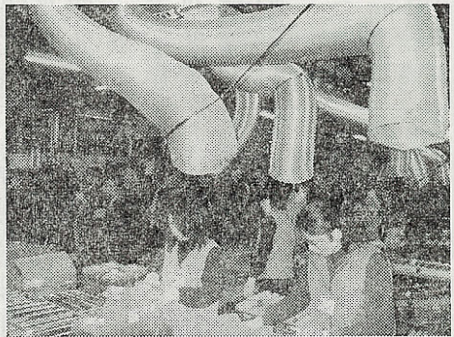
あいさつをする森坪会長

を過時伐採して利用することにより広葉樹林の保護と再生ならびに治山治水を促進し、中山間地の産業活性化と地域の自然環境維持に多大な貢献をしているものであることを強調した。

来賓としては多くの県の農林関係機関や研究機関を始めとして、全国の



大会会場全景



現地視察風景

16市場からも関係者が出席。来賓として(株)北研代表取締役社長の内堀俊幸氏は、祝辞の中で「会員

部正範氏より「菌床しいたけ栽培における発光ダイオードの利用」という話題的にもタイムリーな演題で「発光ダイオード照射によるしいたけの増収効果」「発光ダイオードを利用した害虫防除」といった具体的なテーマを

号、北研705号、北研707号などの新品種についての詳細な栽培特性の説明があった。中でも北研701号は培養期間、発生期間ともに既存品種に比較して大幅な短縮が可能である上に、きのこの自体の棚持ちも良いと

いつもながら高レベルの品評会

総会、研修会に続いて、第17回品評会が行われた。今年は雪深い新潟県での開催ということで通常よりも1ヶ月遅く総会が開催されたため、自然栽培



ルデンサンマッシュ賞は宮城県の早坂誠吉氏(写真)が受賞された。なお、団体賞は九州支部が1位となった。